

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：82621

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370193

研究課題名(和文) 撮影監督宮川一夫アーカイブ・プロジェクト

研究課題名(英文) Archive Project on Kazuo Miyagawa's Shooting Scripts

## 研究代表者

富田 美香 (Tomita, Mika)

独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・その他部局等・研究員

研究者番号：30330004

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトでは、オリジナル資料保存のためのデジタル化として、撮影監督宮川一夫の撮影台本から、書き込みやカット尻フィルム片の貼り込みがある撮影台本のデジタル化を行った。デジタル化の前に、リスト化、資料状態の調査、対象資料のデジタル化にかかわる著作権の調査、デジタル化の手法調査、資料保存方法の調査を行った。

最終的にデジタル化を行った撮影台本は、書き込みのある台本では60冊、カット尻のフィルム片の張り込みが或る台本は19冊である。フィルム片については、1片ずつデジタル化を行った。本プロジェクトはフィルム片貼り込みの撮影台本を本格的にデジタル化した先駆的な事例と言える。

研究成果の概要(英文)：To make digital copies for preservation of original materials, this project digitized Japanese Cinematographer Kazuo Miyagawa's shooting scripts in which he had written notes or he had stuck the film fragments that he had shot. Before the digitization of these scripts, we made the list of them and checked their condition, researched on all of the rights and the best way to digitize and preserve them.

As a result, the digitized shooting scripts are, 60 scripts he had noted in, and 19 scripts he had stuck the fragments. About the film fragments, we digitized by one each. The project will be a pioneer example to digitize and preserve shooting scripts in which many film fragments had been stuck.

研究分野：映画史

キーワード：映画学 アーカイブ 芸術表現 撮影監督 撮影台本 大映 日活 宮川一夫

## 1. 研究開始当初の背景

世界的に高い評価を得ている撮影監督の故・宮川一夫氏は、大映京都の『無法松の一生』(1943、稲垣浩)や『羅生門』(1951、黒澤明)、『雨月物語』(1953、溝口健二)、『おとうと』(1960、市川崑)といった作品群で、フィルムの特質を最大限発揮し、日本映画の黄金時代を築き上げた撮影監督である。

その宮川氏が書き込みを入れた撮影台本や撮影時に残したカット尻のフィルム断片は、宮川氏の追及したフィルム撮影・表現に関する貴重な唯一の一次資料であり、映画研究、映画技術研究、映画復元の際にも必須の参照資料である。とりわけ、映画がデジタル・シネマへと媒体を根本的に変化させている今日、これらの資料分析を通してフィルム媒体の特質をふまえた映画史研究へと深化をはかること、同時に経年劣化の問題も含め、これらオリジナル資料の保存とデジタル化によるアクセスの効率化は、喫緊の課題となっている。

しかしながら、これら資料のデジタル化は、著作権上の課題があり、国内では厚田雄春撮影監督の資料をもとにした「デジタル小津安二郎—カメラマン厚田雄春の視点」(1998年度、東京大学総合研究博物館)以来、試みられることがなかった。台本については、日本放送作家協会と文化庁、国立国会図書館の連携により日本脚本アーカイブス推進コンソーシアムが2012年度に形成されたが、表現者の書き込みがある映画撮影台本は対象外となっている。

研究代表者は宮川氏の活動拠点であった日活京都・大映京都について、21世紀COE、グローバルCOE研究等で、一次資料の調査・収集・デジタル化、オーラル・ヒストリー収集を集中的に行う中で、多数の映画人が自身の書き込み撮影台本や映画制作時に作成した一次資料を所有している現状に接してきた。また、それらの研究とオリジナル資料の保存とを担保し、その活用を推進するためのデジタル化による複製物の作成の必要性、その障壁となっている権利処理や予算・体制の問題に直面してきた。

本研究の着想の背景には、以上の経緯に加え、資料を所有する宮川家から資料保存とデジタル化に関する相談を受けたこと、国内フィルム・メーカーの映画撮影フィルムの製造中止発表により、映画制作からフィルム撮影技術が失われていく現状があった。そこで、従来の懸案事項であった映画人制作の一次資料群の中から、宮川一夫撮影監督の撮影台本とカット尻のフィルム断片を対象とし、映画史の再検証、生成論、映像表現・フィルム技術の研究を推進するべく、当該資料のデジタル化を関連諸組織との研究協力によってすすめ、研究成果の共有をはかることを目標に本研究を立ち上げた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、大別して以下(1)の①から⑤および(2)を明らかにすることと設定した。

(1) 日本映画史・映像史上、世界的に最も評価の高い故・宮川一夫撮影監督の映画制作資料の中から、書き込み撮影台本とカット尻等のフィルム断片を対象とし、以下①から⑤の5点を明らかにする。

①各資料の状態・内容および稀少性

②関連する資料の国内アーカイブ・諸機関の所蔵状況

③当該資料のデジタル化に対する著作権等の諸課題とその解決モデル

④当該資料のデジタル化にかかわる技術的諸課題とその解決モデル

⑤映画史の再検証、生成論、映像表現・フィルム技術等

(2) 本研究の協力組織体制による研究の推進と成果共有を通して、日本における映画・映像の教育・研究・アーカイブに関する産官学国際連携の活性化をはかる。

対象とする資料は、書き込み撮影台本については、第1回撮影監督作である『お千代傘』(1935、日活、尾崎純)から、大映の『無法松の一生』(1943、稲垣浩)、『羅生門』(1950、黒澤明)、『雨月物語』(1953、溝口健二)、『近松物語』(1954、溝口健二)、最終作『舞姫』(1989、ヘラルド、篠田正浩)までの約110冊、カット尻等のフィルム断片については、上記作品等のテスト・ピースやカット尻等のフィルム・コマ約50作品分を対象とすることとした。この中から、資料状態や権利問題を確認し、デジタル化する資料を絞り込む作業を行った。

## 3. 研究の方法

本研究は、前項の目的を達成するために必要な、当該資料の権利・保存・利用に関する関係者・組織との研究協力体制を整えており、研究協力者には、自組織内の調査・調整、研究代表者との情報共有・調整・アドバイスを依頼した。

具体的には、対象とする資料所有者の宮川一夫ご遺族にはデジタル化の許可と資料提供の協力を、映画会社の日活株式会社と株式会社KADOKAWA(旧大映作品の権利所有)には、自社作品の撮影台本とカット尻に関する著作権や肖像権等諸権利の調査・調整・アドバイスを、日本シナリオ作家協会には撮影台本に関する著作権調査・調整・アドバイスを依頼した。京都府京都文化博物館および東京国立近代美術館フィルムセンターには、関連資料の所蔵情報と、アーカイブの立場からのデジタル化へのアドバイスを、撮影監督協会や株式会社イマジカウエストからはカット尻の調査とアドバイスをお願いした。この体制で当該資料の権利問題を1点ずつ確認・調整しながら、研究を推進する方法をとった。

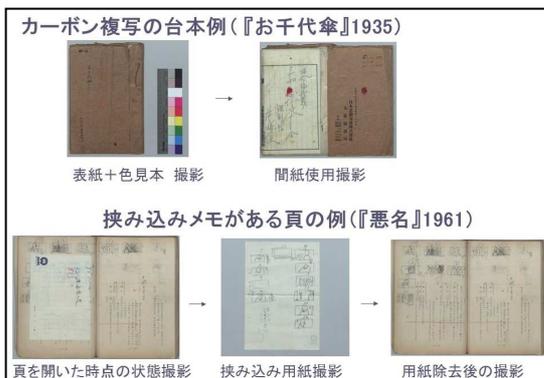
研究計画では、初年度は撮影台本を、2年

目はフィルム断片を中心に調査・デジタル化を実施し、最終年度に総合的研究を計画をたてた。デジタル化は当該資料の扱いやデジタル化の実績のある専門家に委託する方針をとった。

#### 4. 研究成果

書きこみ撮影台本のデジタル化は、1 作品 1 点に限定したうえで、110 作品中の 60 作品のデジタル化を行った。日活株式会社、株式会社 KADOKAWA が著作権所有の作品である。

デジタル化は、表紙から一頁ずつ見開きでスキャニングした。挟み込み資料や貼りこみ資料がある頁は、見開き状態で撮影したのち、挟み込み資料を単体で撮影し、挟み込み資料を除去した見開き状態での撮影もおこなった（下図参照）。



カーボン紙の撮影台本の撮影には間紙を使用した。スキャニングの仕様は、カラー、300dpi 以上、8bit 非圧縮でおこない、画像のゆがみ、傾き、汚れは補正した。また、スキャニングにあたって、原資料の保管を優先し、資料の解綴は極力行わず、補修も、資料の既に破損や亀裂は修復せず、しわのぼしやセロハンテープの剥離作業といったレベルにとどめた。最終的に、RGB-TIFF 画像ファイルと、撮影台本 1 冊単位の PDF も作成し、それぞれ、RGB-TIFF ファイルは 4620 ファイル、PDF は 60 ファイルを作成した。

スキャニング終了後、著作権やデジタル化に関わる諸課題の問題について報告会を開催した。

カット尻のフィルム断片については、カット尻が貼り込まれた撮影台本が非常に多く、それらの資料状態が悪いことが判明したため、資料保存の観点から、デジタル化の対象をカット尻が貼り込まれた撮影台本に絞り込んだ。対象作品は、1945 年の『東海水滸伝』（伊藤大輔・稲垣浩、大映京都）から 1986 年の『近松門左衛門 槍の権三』（篠田正浩、松竹・表現社）までの撮影台本である。

カット尻等のフィルム資料が貼り込まれた撮影台本については多くの課題があった。何よりもまず、貼り込まれたフィルムの乳剤面や貼り込みに使用されたセロテープが密着して頁を開けなくなっている台本や、頁から外れて貼りこみ位置が分からなくなっているフィルム、といった資料状態の問題があ

る。加えて、フィルム片と酸性紙という異なる素材が混在する資料の保存方法とデジタル化の最適な方法、貼り込まれたフィルムをデジタル化時に頁から取り外すかどうか（博物資料破損の問題）、という保存やデジタル化の方法に関わる問題である。そのため、対象資料リストの作成と同時に、デジタル化手法の調査、資料保存方法の調査を行った。

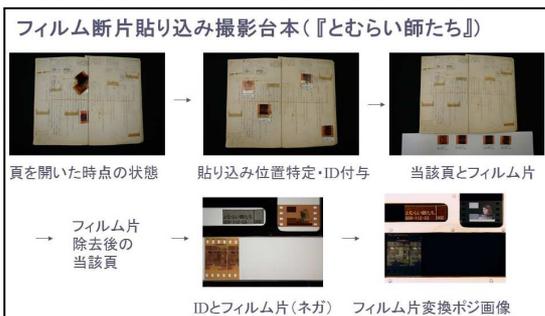
カット尻は宮川一夫コレクションの中で最も貴重な一次資料であり、それが貼り込まれた撮影台本のデジタル化は、前例がない。そのため、デジタル化の点数を増やすことよりも、資料保存とデジタル化の質の担保を第一条件に考え、これらの方法を検討することとした。酸性紙に貼り込まれた貴重なフィルム片に最もふさわしい保存方法については、東京都写真美術館の調査結果を参考にした。撮影台本とカット尻のデジタル化については、東京国立近代美術館フィルムセンター、京都府京都文化博物館、株式会社イマジカウエストの各専門家の知見を得、最終的に、フィルム片を貼り込んだ撮影台本の博物的資料状態を維持することよりも、フィルム片と酸性紙の台本といった素材の保存を優先することとした。すなわち、ネガ保存の観点から、貼り込まれたカット尻フィルム片を酸性紙の撮影台本から外して撮影し、フィルム片と台本を別々に保管する方法である。撮影台本へのカット尻貼り込みの状態を正確に記録するため、貼り込み箇所を可能な限り明らかにすることとした。デジタル化と保存方法の調査と並行して、権利者の了解を得ながら、デジタル化に必要な資材や体制を調整した。

デジタル化の対象資料の絞り込みについては、映画のオリジナルネガを紛失している作品を最優先し、その作品のカット尻貼りこみ台本は可能な限りデジタル化することとした。その結果、これら資料のデジタル化を最優先課題とし、シンポジウム等の当初計画していた報告会は開催せず、その経費をデジタル化に回すこととした。最終的に、オリジナルネガの存在しない作品も含めて、株式会社 KADOKAWA が著作権を所有している作品から、1945 年の『東海水滸伝』（伊藤大輔・稲垣浩、大映京都）から『鬼の棲む館』（1969 年、大映京都、三隅研次監督）までの 19 作品の、フィルムのカット尻貼り込みのある撮影台本のデジタル化を行った。デジタル化の作業は、フィルムの扱いとデジタル化に実績のあるイマジカウエストに依頼した。

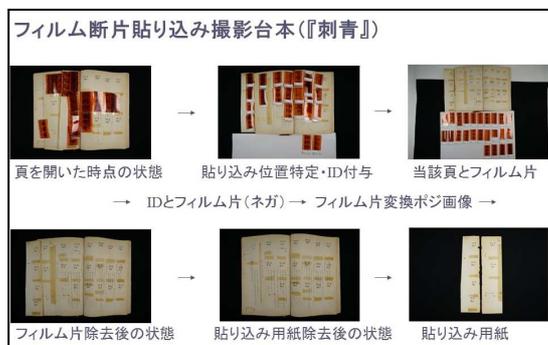
作業手順（下図参照）は、撮影台本を、頁を開いた時点の状態がわかるようにまず撮影し、次に、その頁上にあるカット尻フィルム片に ID を振って撮影、そしてフィルム片を ID とともに頁から外して台本と共に撮影、で撮影台本についての撮影は終了とする。フィルム片については、一片ずつ順番に ID とともに撮影をおこない、撮影したファイルを反転したポジ画像ファイルも作成した。

フィルム片は、ID 番号の紙片とともに 1 点

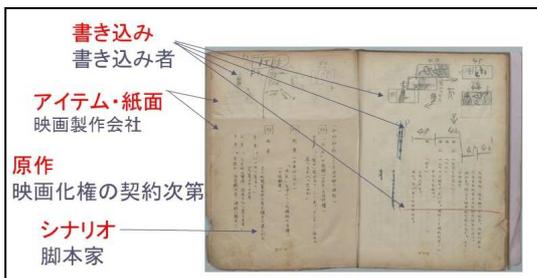
ずつ、ポリエステルの小袋にいれ、中性紙の写真用収納箱に ID 番号順に収納した。



デジタル化の仕様は、撮影台本には SONY NEX-5T のカメラを使用し、ピクセル設定は機種最大の 4192×3264 とした。フィルム片については、RICOH G800 のカメラを使用し、ピクセル設定は機種最大の 4608×3456 とした。撮影台本にフィルム片以外の資料がはさまこまれている場合は、書き込み入り台本のデジタル化の時と同様に、挟み込み用紙についても 1 画像を作成した (下図参照)。



本研究の目的である「当該資料のデジタル化に対する著作権等の諸課題とその解決モデル」については、台本上のシナリオ (テキスト)、書き込み、カット尻のコマ、台本自体、それぞれ権利者が異なることから、デジタル化の成果公開については、これら各権利者の許諾を得る必要があり (下図参照)、そ



のため 1 頁ごとに 1 画像を作成し、各権利情報を蓄積する方法をとった。

もう一つの目的である「当該資料のデジタル化にかかわる技術的諸課題とその解決モデル」では、シナリオ (テキスト)、書き込み、カット尻のコマが、それぞれ材質も性質も異なるうえに、確認画像に求められる精度も異なることから、それぞれに適した上述の撮影方法を採用した。

最終的に、デジタル化を終えたオリジナル資料は、宮川一夫ご遺族に返却し、デジタ

ル・データは、ご遺族と当該資料の権利保有者 (映画会社、脚本) ならびに研究協力機関のアーカイブに、複製資料分散による保存の意味も含めて、資料として提供した。この三年間の研究過程と、成果物としてのデジタル・データの提供により、研究目標の (2) もある程度達成できたと考える。

本研究後の課題として、資料保存の観点からデジタル化を優先し、研究目的 (1) の⑤にあたる、映画史の再検証の調査を十分な成果発表を伴う形でできていなかったことを指摘する。重要な今後の課題としては、研究成果の公開をオープンにしにくい一つの理由でもある、複雑な著作権と、それをふまえたデジタル・データ活用の方法、さらには、今回採用したオリジナル資料のフィルム片と酸性紙資料の保存方法についての検証、これら混合媒体の活用に適したデジタル化の方法のさらなる検討、カット尻フィルム資料のデジタル化の推進、などを列記しておきたい。そのための基礎的な参照資料として、本研究の成果が活用されれば幸いである。最後に、今後このような活動・研究を続けていくうえで、フィルムを熟知した技術者の存続と育成も非常に重要な課題であることを付言しておきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 12 件)

- ① 冨田美香 「映画文化の保存：デジタルシフト下の危機的課題」、『日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点セミナー』、2015 年 7 月 15 日、立命館大学アート・リサーチセンター (京都府京都市)
- ② 冨田美香 「記憶の場：昭和の大札と映画都市京都」、『人文研アカデミー』、2015 年 6 月 14 日、京都大学時計台記念館国際交流ホール III (京都府京都市)
- ③ 冨田美香 「1950 年代京都における映画興行の様態 —アトラクションつき映画興行を中心に— その 3」、『昭和期後期における日本映画史の再構築』、2015 年 3 月 28 日、国際日本文化研究センター (京都府京都市)
- ④ 冨田美香 「疑似家族の〈間〉と「茶の間」、『「間 (ま) と間 (あいだ)」日本の文化・思想の可能性』、2015 年 3 月 13 日、ストラスブール大学 (フランス・ストラスブール)
- ⑤ 冨田美香 「史料からみる砧撮影所 —音が芸術の殿堂—」、『東宝スタジオ展 映画=創造の現場』、2015 年 2 月 28 日、世田谷美術館 (東京都世田谷区)
- ⑥ 冨田美香 「1950 年代京都における映画興行の様態 —アトラクションつき映画興行を中心に— その 2」、『昭和期後期における日本映画史の再構築』、2014 年 9 月 27 日、国際日本文化研究センター (京都府京都市)
- ⑦ 冨田美香 「1950 年代京都における映画興行

の様態 ―アトラクションつき映画興行を中心―、『昭和期後期における日本映画史の再構築』2014年4月26日、国際日本文化研究センター（京都府京都市）

⑧富田美香「撮影監督宮川一夫コレクションの保存とデジタル化の試み―撮影台本を中心―」、『撮影監督撮影監督宮川一夫コレクションの保存とデジタル化の試み―撮影台本を中心―』、2014年3月22日、京都文化博物館（京都府京都市）

⑨富田美香「『合同通信』から読む京都の映画文化―興行街と撮影所―」、『関西の映画興行史の基礎調査―『合同通信』を中心に―』、2014年3月5日、国際日本文化研究センター（京都府京都市）

⑩富田美香「吉川英治の映画―1920年代から1950年代への連続／不連続―」、『現代日本〈映画-文学〉相関研究会』、2013年12月7日、立命館大学末川記念会館（京都府京都市）

⑪富田美香「Japan Expo '70 and Japanese Cinema」, Journées d'étude « La tradition dans le cinéma japonais », 2013年10月19日、ストラスブール大学（フランス・ストラスブール）

⑫富田美香「大学における映画文化アーカイブの試み―時代劇映画を中心―」、『時代考証学会 第3回フォーラム in 京都 「時代劇文化を伝えていくために―アーカイブズからみた時代劇のこれまでとこれから―』、2013年6月30日、京都文化博物館（京都府京都市）

〔その他〕

○シンポジウム企画・開催

『撮影監督撮影監督宮川一夫コレクションの保存とデジタル化の試み―撮影台本を中心―』、2014年3月22日、京都文化博物館（京都府京都市）

<http://www.arc.ritsumeimei.ac.jp/lib/GCOE/info/20140322.pdf>

○執筆

①石原興 聞き手・構成：富田美香「『必殺』シリーズ 石原興監督は語る」『NFC ニュースレター』125号、2016年2月、11-12頁。

②藤井秀男／宮島正弘 聞き手・構成：富田美香「三隅組 撮影スタッフは語る」『NFC ニュースレター』124号、2015年12月、5-7頁。

③富田美香「色つきではなく色彩で：イーストマンカラーで求めた色彩」『NFC ニュースレター』114号、2014年4月、5頁。

○報道

①コメント：種田龍二「名作『羅生門』送り出す 大映京都撮影所の遺産（1）」内、『日本経済新聞』2016年3月15日付

[http://www.nikkei.com/article/DGXLASJB04H7T\\_U6A310C1960E00/](http://www.nikkei.com/article/DGXLASJB04H7T_U6A310C1960E00/)

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

富田 美香 (TOMITA MIKA)

東京国立近代美術館・研究員

研究者番号：30330004